

朝鮮の字音

金沢庄三郎

神代紀上、宝篋開始章、第三、一書、至日、神、閑、居于天石窟也、諸神遣、中臣、連、遠祖與

合産靈、兎天、兎屋、命、而使、祈焉、與台産靈、此云許語等武須毗とある「此云」は一切経音義から採った形式で、此場合與台産靈と漢字では書くが、此即ち日本では許語等武須毗と云ふと注したものである。中でも「與」の字をゴゴと音読することを注意したもので、これは朝鮮の古字音、今日の音はhungである。

応神十四年紀月、君自百濟來歸とあるは、姓氏録右京諸蕃に融通王蒼田天皇十四年来朝、率百二十七員、百姓一帰化とあるもの、「通」の朝鮮音はtongであるから、月の訓に該当する。

続後紀仁明天皇嘉祥二年七月、近江国粟太郡、人木工大允正七位下小槻、山ノ公家島賜、姓與統公とある「統」の朝鮮音もtongであれば、與統はユツギと読み、小槻と類音の嘉名を選ばれたことが分る。

神代紀 八洲起原章 婦人、反先言乎、事既

不祥、垂仁即位前紀因二夢、祥、以立為二皇太子、仁徳元年紀大臣对言、吉、祥也、瑞珠盟約章此、則神性雄健使、之然、也、の「祥」は朝鮮音Sung「性」はsongで、国語ではない。(国学院雜誌特輯号 国語学所載の「字注訓と字音訓」参照)

其他、山城国愛宕郡於多岐、大和国葛下郡当麻郷多以来、相模国佐加三などの地名は、いづれも朝鮮音「宕」tang「当」tang「相」sangに拠つたもので、喉内音の相通である。

垂仁二年紀一云類二有、角人乗、一、船泊于越、国、箭飯、浦、故号二其、処、一曰、角鹿、一とあるやうに「角類」の義で、万葉集にも角鹿、津とある此地を後に敦賀、都留我と呼ぶのは舌内音タナラ相通で、その角ある人意富加羅國王之子、名都怒我阿羅斯等を本文に任那人蘇那曷叱智としてゐるが、「曷」の朝鮮音がharであることを知れば、「ツヌガアラシト」と「ソナカアラシチ」と同一名の異なる伝であることに疑はない。

播磨国波里方の「播」は波ノ去声で音へであるから、高山寺本「囉」に作るを正しとする。駿河国須流加は舜河鷹河とも書く。これ等はいづれも古内音の通じたもので、上野ノ国群馬郡久留末はもと民族名で、アイ

又語クルミに相当するものであるが、今は古音を棄てムグンマと呼ぶ。(言語に映じたる原人の思想)参照)

その他、万十一愛等思篇来師、万十箱干冬柳者などの「篇」・「干」は古音で、倭名鈔伊勢、国安濃郡村主郷須久利などの「村主」は帰化の蕃人に賜ふ姓であるが、真興王拓境碑に「地主」三国史記に「村干」とあり神功四十九年紀に百濟、意流、村とあれば、「村干」はスキ・クリの古音を伝へたものと見るべきである。

然るに、これ等「敦」・「駿」・「群」・「篇」などの古音は今日の朝鮮には一つも伝つてゐないが、新羅、官名波珍滄或云海干を、古事記に波鎮漢紀、書紀に波珍干岐とし、釈紀に波珍干岐(署名)と読んでゐるのは「珍」の古音トリなることを教へる唯一の資料であつて、試みにこれを百濟の古地名に徴するに、百濟馬突(音ton)果一云馬珍難珍阿果一云月良(鶏林類事月日笑)など幾多の例証がある。(朝鮮学報、第三輯「朝鮮古地名の研究」参照)

日鮮語の系統論は姑く措き、その漢字音の比較対照のみにても、我古典の研究上欠くべからざることを痛感するものである。(昭和三十年四月一日稿)